昭和二十年四月。佐紀は家族で疎開してきた祖母の故郷福井県坪江村の国民学校に入学した。一年生は男女合わせて二十一人。他の学年も一組だけの木造の小学校だ。

お母さんが自分の着物をほどいて縫ってくれたもんぺにズック靴を履いて、山を背にした学校に通う。たすきにかけた、おばあさん手作りの帯芯のかばんには、国語の「ヨミカタ一」とセルロイドの筆箱しか入っていない。

近所の同級生は初代。毎朝、佐紀は祖父母や母、妹の亜紀と一歳になる弟の明に見送られて、初代を誘いにいく。近所といっても、これまで住んでいた大阪の家と家がくっついた下町とは大違い。家がぽつんぽつんと建っているから、初代の家まで数分かかる。

初代の家族は祖父母とお母さんの四人で、お父さんは佐紀のお父さんと同じく戦争に行っている。

組で一番背が高い初代はケンカだって強く、男の子がちょっかいをだしても、かばってくれる心強い友達であるが、佐紀の大阪弁を先にたってからかうのも初代だ。ヘンな節で真似をして、男の子たちといっしょに笑うので、教室ではなるべくしゃべらないようにしている。

担任は、先生になったばかりの女の先生。

授業は「ヨミカタ一」の「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」を読んだり、先生のオルガンに合わせて　♪海は広いな　おおきいな　と唱歌を歌ったり。運動場を耕して植えたかぼちゃの苗は、毎朝水やりに行くのが楽しみだ。

入学して一カ月たった五月晴れの午後。

学校の裏門から続く低い山に向かった。窮屈になったズ